研究課題　勝尾寺文書の史料学的調査・研究

研究経費　二一万円

研究組織

　研究代表者　　　市澤　哲（神戸大学大学院人文学研究科・教授）

　所内共同研究者　末柄豊・伴瀬　明美・小瀬　玄士

　所外共同研究者　藤田　励夫（文化庁・主任文化財調査官）・佐藤　健治（文化庁・文化財調査官）・三好　英樹（大阪府教育庁・副主査）・磐下　徹（大阪市立大学文学研究院・准教授）

研究の概要

（１）課題の概要

中世における寺院の広範な活動の展開を考えるうえで、北摂に位置する勝尾寺は重要な存在である。同寺は中世文書だけで１０００点以上を数える文書を蔵している。それらは、同寺が祈祷によってその信仰を集めたことを証する史料のみならず、土地売買史料、在地における寺院の意義を物語る史料など、中世の在地社会、在地社会と寺院の関係を考える上で欠くことのできない史料を豊富に含んでいる。さらに、権力との関係を物語る政治史研究の素材ともなる史料も含まれている。同寺文書群は、史料点数、内容ともに中世在地寺院文書として、希有の存在といえるだろう。  
　すでに同寺の文書は、中世の土地売買、土地所有研究において活用されてきているが、１９６０年代に編まれた『箕面市史』で調査が行なわれて以来、史料学的な調査はほとんど行われておらず、その史料群の全貌も実は明らかになっていないのが現状である。本共同研究は、同寺の協力をもとに、勝尾寺文書の原本調査を行ない、史料学的な研究を進めようとするものである。

（２）研究の成果

COVID-19感染症の流行により、2年目となる2019年度末に計画していた調査を十分に行なうことができなかったため、特例として延長を申請し、2020年度も引き続き本共同研究を行うこととなった。  
　本研究を延長する理由は、御寺において所蔵史料の原本調査を行ない、その成果を共有資源化することである。そのため、年齢等調査先の状況を勘案し、慎重に調査時期を探ったが、期待に反してCOVID-19感染症の流行は必ずしも沈静化しなかったため、本年度も御寺の調査を実施することは叶わなかった。  
また調査の円滑化のために、昨年度末に実施した勝尾寺文書のテキストデータ化を進め、補助員の協力を得てこれを完成させた。